

社会主義社会の歴史的位位置と

発展段階区分についての覚え書

小野一郎

現代社会主義の歴史的位位置をどうとらえるかという問題は、近年ますます鋭く発せられるようになった「社会主義とは何か？」という問いかけにかかわる、一つの大きな論点になっている。本稿の基本的問題意識はこの問題への私なりの理論的接近方法を探ることにある。主題については昨年刊行の拙著『現代社会主義経済論—理論と現状』（青木書店）の序論や第二部第一章などである程度論じているので、本稿では重複は必要最小限にとどめ、いくつかの論点について覚え書の形でとりあえず私見の補足的展開をこころみることを主眼としたい。

一 現代社会主義の歴史的位位置をめぐる問題状況

1 社会主義の世界史的形形成過程の現局面の位位置

十月革命によって始まった社会主義の世界史的形形成過程は現在その第二段階にあると考えられる。第一段階の主要な標識は社会主義体制がソ連—国社会主義の枠にとどまったことに求めらるるとするなら、第二段階への移行の主たる標識はそれがなお部分的とはいえ一つの世界体制に成長転化をとげたことに求められよう。この第二段階の展開の現局面の主要な特徴は、(一)現存社会主義諸国における以前のソ連型体制からの脱皮過程の進行、(二)発達した資本主義諸国における「先進

的民主主義」の軌道の延長線上での社会主義の理念の提示とそれにもとづく運動の展開、にあるといえよう。しかし、(一)の過程が少なくとも現在までのところ多くの困難や深刻な問題の噴出をともなうものとなったことは周知のとおりで、こうした現状は、社会主義の世界史的形成過程は第二段階にあるといえるにしても、その現局面をも含めて、社会主義は世界史的にみたばあい、なお生成過程ないしは初期的形成過程にあるにすぎないことを物語るものといわねばなるまい。

このような社会主義の世界史的形成過程の現局面の位置は、第一に、これを世界的規模においてとらえるとき明らかである。すなわち、社会主義は一つの有力な世界体制に成長したものの、そのひろがりはまだ世界資本主義の中心地域には及んでいないし、経済力の点でも資本主義に比しなお劣位にあるというのが現状である。第二に、このような現在の条件のもとでは、資本主義世界との共存・対抗関係が社会主義世界に少なからぬ影響を及ぼすし、その発展に一定の制約を課すことは避けられない。そのばあい、現存社会主義諸国のはとんどが出发点において経済・社会・文化の後進性を抱えていた国々であるだけに、こうした現在の世界史的環境が、「旧

社会の母斑」をくつつけた社会主義のもつ後述のような「過渡的・二重的性格」を、特殊な形態において拡大する方向に作用する余地は大きい。現存の社会主義世界で、時として社会主義の理念そのものに反するような現象をともなうほど複雑な事態が現出するのは、一つには多分にこのことによるところがあるように思われる。

2 現代社会主義の歴史的位置に関する諸規定

上述のような社会主義の世界史的形成過程の現局面の展開を背景として、科学的社会主義の理念の実現をめざす運動のなかで提起された、現代社会主義の歴史的位置をめぐる主要な理論的規定を列挙するなら、さしあたり以下のものをあげることができる。

(一) 現代は資本主義から社会主義への移行の時代である、とする一九六〇年の共産党・労働者党代表者会議の声明(いわゆるモスクワ声明)の規定。

(二) 六〇年代前半の中ソ論争において提示された過渡期の歴史的位置に関する両国の相対立する公式の見解。両国の違いは、ソ連説が基本的に従来通説を踏襲して資本主義から社会主義に至る歴史の時期を過渡期と規定し、これと共産主

義の低次の段階としての社会主義とを厳密に区別するのにたいて、中国の新説は資本主義から高次の共産主義に至る歴史的時期の全体を過渡期と規定し、共産主義の低次の段階としての社会主義をこれに含める点にある。

(三) 社会主義社会の発展段階区分にかかわる「発達した社会主義段階」規定。これに関しては、一九七一年のソ連共産党第二四回大会で提起された、現段階のソ連は「発達した社会主義社会」の段階にあるとする規定、および六〇年代から七〇年代にかけて一連の東欧諸国の共産党大会で確認された、これら諸国は現在「発達した社会主義社会」の建設期にあるとする規定がある。なお、後者は一九六〇年チエコスロバキア共産党の会議で自国について提起されたのを受ける形で、前記モスクワ声明でも当時の時点でいくつかの東欧諸国について確認されている。

(四) 現代社会主義は世界的には生成過程にある、という日本共産党の近年の規定。この規定には、社会主義の世界史的形成過程は発達した資本主義諸国の社会主義への移行とともに基本的に完了する、という含意があると考えられる。

以上の列挙からも明らかなように、現代社会主義の歴史的

位置の確定の問題は、過渡期および社会主義社会の理論的位置規定の問題と絡み合う形で検討と論争の対象となつてきている。そこで、以下ではまず後者にかかわるマルクス主義古典の諸命題およびその解釈について考察し、そのうえで社会主義社会の発展段階区分とソ連社会主義の現在位置について検討してみよう。

二 社会主義社会の歴史的位置に関する古典的命題と過渡期の位置規定

1 マルクス・エンゲルスの命題

マルクス・エンゲルスによる社会主義社会の歴史的位置規定に関しては、何よりもまず、資本主義社会にとつて代るべき新しい社会の成立の標識を、彼らが社会構成体の区別の基本的標識をなすとみなした生産手段の所有制度の点、すなわち、資本主義的私的所有の否定¹¹社会的所有の形成に求めたことが指摘されねばならない。このことは、『共産党宣言』、『資本論』、『反デューリング論』、その他の周知の命題が示すところである。彼らは新しい社会を社会主義社会とも共産主義社会ともよんでいるが、両者は社会的所有に立脚すると

いう点で本質において等置されており、資本主義的社会構成体に対置される単一の社会構成体の枠のなかに位置づけられていることは明らかである。なお、マルクス・エンゲルスは

私的所有の否定は商品生産の消滅という標識を提起しているが、この標識は新しい社会の成立の標識というよりは、社会的所有の発展、すなわち、新しい社会の成熟の標識と考えられる。この問題はさしあたり本稿の立論には直接関係がないので、ここではとりあげない。

第二に、新しい社会の上部構造の重要な標識として、「国家の死滅」に関する『反デューリング論』の命題があげられる。プロレタリアートが国家権力を掌握し、そのもとで生産手段の社会的所有が確立されるなら階級搾取は消滅するから、特殊な階級抑圧機関としての国家は無用の長物となり次第に死滅する、というのがこの命題の趣旨である。新しい社会の成立とともに国家の死滅の過程が始まり、この社会が高度の発展をとげるにもなつて国家は死滅してしまふとされているわけで、国家の死滅という標識は、新しい社会の成立の標識としてよりは、むしろその成熟の標識として提起されたものといつてよい。共産主義社会に残る「今日の国家機能に似

た社会的機能」の問題や、「共産主義社会の国家機構」の問題への『ゴータ綱領批判』の言及は、このような「国家の死滅」の命題の別の表現にほかならない。

第三に、新しい社会の成熟の問題にかかわつて、共産主義社会をその低次の第一段階と高次の第二段階に大別する周知の『ゴータ綱領批判』の命題がある。第一段階は、社会的所有の形成をみたものの「生まれたばかりで」完全な成熟をとげておらず、「旧社会の母班」をくつつけた共産主義社会であつて、「能力に応じて働らき労働に応じてうけとる」原則が作用するののたいして、第二段階は、「それ自身の基礎のうえに発展した」共産主義社会であつて、「能力に応じて働らき必要に応じてうけとる」原則が作用するとされる。共産主義社会構成体を歴史的発展過程において把握したばあい、

社会主義社会は「共産主義それ自身の基礎」が未成熟で「旧社会の母班」をくつつけた、この社会構成体の低次の段階として位置づけられているわけで、この意味で過渡的・二重的性格をおびたものとして規定されているといえよう。

第四に、資本主義社会と共産主義社会の間の過渡期に関する『ゴータ綱領批判』の命題をあげねばならない。資本主義

社会と共産主義社会」との間には「前者から後者への「革命的転化の時期」があり、それに照応して「政治上の過渡期」があるとしたうえで、この時期の国家は「プロレタリアート・ディクタトゥーラ」であるとしている。新しい社会への移行

の基本的標識を所有制度の転換に求める上述の観点に立つとき、ここにいう「革命的転化」とは『資本論』にいう「収奪者の収奪」のことにほかならず、資本主義的私的所有から社会的所有への革命的転換を何よりも意味するといわねばならない。また、この「収奪者の収奪」はプロレタリアートによる国家権力の掌握と同時に「一挙に」実現するわけではなく、プロレタリアートの政治的支配のもとで「次々に」実現してゆくのであって、そのためには一定の歴史的期間が必要とされることについては、『共産主義の原理』や『共産党宣言』などが示唆するところである。さらに、プロレタリアート・ディクタトゥーラは、このような「革命的転化」を遂行するための過渡期の国家として位置づけられているのであって、前述の新しい社会において残るとされる国家機構に似た何らかの社会管理機構とは、その本質において明確に区別されるべきものといわねばならない。以上のことから、『ゴータ綱領

批判』にいう過渡期とは、プロレタリアートの権力の樹立から、この権力による社会的所有の革命的確立、すなわち、社会主義社会の成立＝共産主義的社会構成体の成立に至る歴史的時期をさすものと考えるのが首尾一貫する。

2 レーニンの命題

レーニンは彼がおかれた現実を理論的に総括するなかで、過渡期と社会主義社会の位置規定に関するマルクス・エンゲルスの命題にもとづきつつ、これに一連の補足を加えて、とくに過渡期の規定をいっそう明確かつ豊富なものに発展させた。この点に関しては、第一に、『ゴータ綱領批判』にいう「革命的転化の時期」としての過渡期を、資本主義社会から社会主義社会への過渡期として明示的に規定したことがあげられる。このことは、『ハンガリア労働者へのあいさつ』での「資本主義から社会主義へのかかなり長い過渡期」の必要性の指摘、その他が示すとおりであって、レーニンにおいては、「資本主義から共産主義への過渡期」という表現が用いられているばあいにも、その共産主義は低次の段階としての社会主義を含むものと解される。

第二に、過渡期の基本的な経済的標識およびそれに照応す

る基本的階級を規定した、『プロレタリアート・ディクタターラの時期における政治と経済』の命題があげられる。社会主義・資本主義・小商品生産の三つのウクラードの並存、したがってまた労働者階級・資本家階級・小商品生産者の階級（とくに農民）の三つの階級の並存、という命題がそれである。マルクス・エンゲルスが提起したプロレタリアート・ディクタターラという過渡期の政治的標識に加えて、そのもとの私的所有の社会的所有への革命的転化の過程の経済的標識と階級の規定を新しく提起したわけである。

第三に、過渡期の国家および社会主義社会における国家の必要性と本質に関する『国家と革命』などの規定があげられる。過渡期の国家としてのプロレタリアート・ディクタターラについては、国家のもつ階級抑圧機能は保持されるとしつつも、これを資本主義のもとの「本来の意味の国家」とはことなる「過渡的な国家」として位置づけており、両者の基本的差違を少数者⇨搾取階級による多数者⇨被搾取階級の抑圧機関から、多数者による少数者の抑圧機関への転化に求めている。さらに、共産主義社会の成立とともに国家の死滅が始まるとしたうえで、その低次の段階である社会主義社会に

おいては国家の階級抑圧機能は不必要となるが、すべての社会成員が社会の管理の能力を身につけるには一定の歴史的期間が必要であり、また「能力に応じて働らき労働に応じてうけとる」という労働と消費の基準を強制し、社会的所有およびこの基準に含まれる「ブルジョア的権利」を保護する必要があるところから、そのための国家の必要性が残ること、そしてこの国家は「非政治的」国家に転化してゆくことを規定している。レーニンは、マルクス・エンゲルスのプロレタリアート・ディクタターラと国家死滅の理論にもとづきながら、過渡期の国家としてのプロレタリアート・ディクタターラと、社会主義社会で残る「死滅しつつある国家」とを本質において厳密に区別しているのである。

以上で明らかのように、マルクス・エンゲルスにあってもレーニンにあっても、社会主義社会は何よりも社会的所有に立脚する共産主義的社会構成体の低次の段階として位置づけられている。また、過渡期は、生産手段の所有制の革命的転換に必要な資本主義社会から社会主義社会に至る一定の「特殊な歴史的時期」として位置づけられており、この転換を可能ならしめるプロレタリアート・ディクタターラという

政治上の過渡期がこれに照応するものと規定されている、と解されるのである。

3 移行の理論モデルとしての古典的命題と過渡期の位置づけ

上述のように、マルクス主義古典の諸命題は過渡期および社会主義社会の歴史的位置を、すぐれて所有制度とその転換という社会構成体の区別の基本的標識にもとづいて規定しており、歴史発展過程の一般理論的把握の次元で移行の理論モデルを提起したものと見えるであろう。こうした一般理論的規定の意義は過渡期および社会主義社会の基本的特質を明確に示しうる点にあり、この点では両者の歴史的位置は判然と区別される。したがって、過渡期と社会主義社会のもつ過渡的性格とは本質において混同されてはならない。このように、一般理論的には、社会主義社会はいかに未成熟な社会主義社会であるとしても、もはや「革命的転化」の時期ではなく、すでに社会的所有に立脚する共産主義社会の第一段階にあるのであって、前出の中国の新説の主張のように過渡期に含まれるわけではない。現実の歴史の過程においても、社会主義段階を過渡期に含めるこの把握は、「革命的転化の時期」の

階級闘争の方法を社会主義社会にもちこむやり方に容易に導きえたとし、それが文化大革命の混乱をもたらした理論上の大きな要因であったことは、現在では誰の目にも明らかである。

他方、古典の一般理論的規定は移行の基本的な道すじを明らかにしたにすぎないこと、現実の移行過程はしばしばわめて複雑な要素が絡んだ具体的な歴史的条件に規定される形で展開すること、に注意する必要がある。ここに移行の理論モデルの限界があるわけであるが、中国における右の理論上の混乱は、一つにはこの点で古典のモデルがもつ限界を無視して、現実の過程の方に無理に古典の理論的規定を引きよせようとした結果もたらされたものといえよう。ここでは詳論できないが、たとえば、現在の社会主義諸国の国家はすべて基本的にはプロレタリアート・ディクタトゥラの国家はすべてとまわっていると考えられるが、だからといって、社会主義社会が過渡期に含まれるということにはならないし、現状把握の問題としてもこれら諸国がなご過渡期にあるということにはならない。また、現在のソ連の国家はすでにプロレタリアート・ディクタトゥラであることをやめて、全人民国家に

転化しているという第二回党大会（一九六一年）以来のソ連

の通説などは、現実の過程を正確にとらえたものとはいえないし、上記の中国のばあいとは逆に、古典の命題の方に現実の過程を無理に引きよせようとするものといわねばなるまい。

いずれにしても、現在の社会主義諸国では過渡期の国家としてのプロレタリアート・ディクタトゥーラが存続していると考えざるを得ない根拠があるが、それは社会主義が世界的にはなお初期の形成過程にあるにすぎないという現在の段階における、具体的な国際的・国内的条件によるものであって、社会的所有が少なくとも制度としては確立している現在の社会主義諸国が社会主義段階にあることを否定するものではない。もちろん、この点での古典の規定からの現実の乖離はきわめて基本的な点での乖離であるし、現存社会主義社会は少なくとも現在のところ、いわば一定の過渡期の要素がもこまれた社会主義社会であるといつてよいであろう。社会主義の世界的形成過程の現在の段階では、このような乖離ないしは社会主義社会に異質の要素の混在は基本的には客観的条件によって規定されたものであって、こうした状況が基本的に解消するための重要な条件として、発達した資本主義諸国における移行過程の一定の現実的進展があげられねばならないであろう。

4 「社会主義Ⅱ過渡期」説への批判的コメント

過渡期の位置づけにかかわって、近年わが国の学界では、マルクスにおける社会主義社会の理論的位置規定を彼の先進国世界革命構想と結びつけて、マルクスは社会主義への「直接の移行」を提起したとする一方、社会主義Ⅱ過渡期とみなして、レーニンのいう資本主義から社会主義への過渡期とマルクスの過渡期とを区別し、レーニンの過渡期を、後進性と一國社会主義というロシア革命の特殊な条件に規定された「特別の過渡期」とみなす見解が、一部で提起されている。

そのさい、たとえば、戦時共産主義の時期の「社会主義への直接的移行」方針からの転換に関する『新経済政策について』の命題や、「国家独占資本主義と社会主義との間にはどんな中間的段階もない」とする『さしせまる破局、それとどうたたかうか』の命題などが、引合いに出されたりする。しかし、これらの個所でレーニンが社会主義へのいわば過渡期ぬきの移行や「特別の過渡期」について語ったものとは解したいように思われる。前者のばあい、強襲攻撃という方法

で直接に社会主義建設に移行するのか、それとも幾多の後退をとまなう長期の攻囲という方法をとって、ひとまず国家資本主義に後退してから社会主義建設に移行するのか、という移行の方法の転換の問題が論じられているのであって、過渡期の歴史的位置規定がころみられているのではなく、「特別の過渡期」が新しく提起されたわけではない。また後者のばあい、真に革命的民主主義的な国家のもとでは国家独占資本主義は社会主義にむかつての一步となるという立論をふまえたうえで命題であって、ここでいう国家独占資本主義とは革命的民主主義的国家の成立という、まさに過渡期の条件のもとでのそれを含むものと考えられるから、この命題も過渡期ぬきの移行をレーニンが提起したということにはならない。なお、社会主義段階を過渡期に含める中国や一部のわが国の見解のなかには、レーニンもそのような立場をとっていたとする主張がみられるが、これはレーニンを完全に読み違えたものと評するほかはない。

「社会主義Ⅱ過渡期」説ないしは社会主義への「直接移行」説は前出の中国説の亜種ともいえようが、すでに述べたように、マルクス・エンゲルスにあっては、過渡期や社会主義

社会の歴史的位置の問題は一般理論的規定の問題として考察されており、世界革命か一國革命か、先進國革命か否か、といった革命と移行の具体的条件は考察の対象には含まれていない。レーニンの過渡期の規定も何よりもこの点が基本であって、彼の過渡期を「特別の過渡期」に矮小化する見解は、ロシアの後進性と一國社会主義という特殊性のある種の過大評価によるものといえよう。また、この新説は社会主義段階と「革命的転化の時期」とを混同している点では中国説と軌を一にするが、社会主義への「直接の移行」に重心がかかっているかぎりでは、「革命的転化の時期」ぬきの移行が可能であるかのような幻想に導きうるものといわねばなるまい。

三 社会主義社会の発展段階区分とソ連社会主義の現在位置

1 過渡期の終了Ⅱ社会主義社会の成立の形式的契機と実質的契機

過渡期と社会主義社会とは、所有制度およびその革命的転換という基本的標識にもとづいて厳密に区別されねばならないとすれば、過渡期の終了Ⅱ社会主義社会の成立の時期の確定もまたこの標識による必要があるということになる。この

問題については、ソ連のばあい、第八回臨時ソビエト大会（一九三六年）でのスターリン報告の周知の規定以来、ソ連は当時の時点で過渡期を終えて社会主義社会に入ったものとされている。この時期区分の主たる根拠をなしているのは、(一)第一次および第二次五ヶ年計画により社会主義的工業化が基本的に完了したこと、(二)三〇年代前半の農業の全面的集団化にもなつて、国家的所有と集団的所有との二つの形態で生産手段の社会的所有制度が成立して、国民経済をほぼ全面的に支配するようになったこと、の二点である。この時期区分は、社会主義的物質的前提としての生産力基盤の初発的形と、私的所有の社会的所有への革命的転換の基本的完了とを標識としているわけで、この点で妥当性をもつものと考えられる。

しかしながら、右の問題にかかわつて、社会主義社会の成立の形式的契機と実質的契機の区別と統一を明らかにする必要がある。社会主義的所有の成立は、社会主義的所有ないしは生産関係の制度的・形式的形成の完了を意味するとしても、それ自体としては必ずしも実体的・実質的完成の完了を意味するものではないからである。すなわち、第一に、

社会主義的所有制度の成立は、剰余価値生産の搾取の基盤の否定、したがつてまた、全社会成員の全面発達とこの方向での物質的・文化的欲求の充足という社会的生産の基本的動機の形成と始動をともなう。そのかぎりにおいて、それは社会主義的所有ないしは生産関係の制度的・形式的形成の完了を意味すると同時に、その実体的・実質的完成の基本的契機を含んでいる。しかし、第二に、それは社会主義の十全な生産力基盤、分業廃棄の労働転換の方向に次第に進化してゆくような基礎的生産関係、経済・社会の自主的で共同的な計画的な管理運営機構などの形成の全面的完了を、それ自体として意味するわけではない。これらが実体をもつたものとして形成され、それ自体の基礎のうえで再生産され発展を上げてゆくための実質的土台が完成するまでは、社会主義的所有ないしは生産関係の実体的・実質的完成が完了したとみなすことはできない。

三〇年代後半のソ連に関して過渡期の終了の社会主義社会の成立を語りうるのは、以上のような社会主義的所有の制度的・形式的完成の完了という意味においてのことである。この点で、ソ連その他における「発達した社会主義段階」規定

は、社会主義社会の成立の二つの契機の区別に事実上道を開いた点で理論上重要な意味をもつといえるであろう。

2 「初期社会主義段階」規定とソ連におけるその

特殊な未成熟性

上述の二つの契機の視角に立つとき、過渡期が終了して社会主義社会の基本的標識である社会主義的所有が制度上は成立したが、その実体がなお完全に形成をみておらず多分に未展開であるような社会主義社会の初発的發展段階を、「初期社会主義」の段階と規定することができる。そして、生産力基盤、基礎的生産関係、経済・社会管理機構などにおいて、社会主義の内在的特質が実体として十分な展開をみせるような段階を、「発達した社会主義」あるいは「成熟した社会主義」の段階と規定できよう。

社会主義社会の發展段階のこのような区分は、社会的所有の成立を基本的標識とする過渡期の終了＝社会主義社会の成立を、歴史上一定の時間的へだたりのある二つの時点に分解してとらえることを意味する。この二つの時点によって区切られる「初期社会主義」は、基本的には社会主義社会の發展過程の初発段階をなすとともに、同時に一定の意味において

社会主義社会の形成過程の最終段階をなすという位置にあるわけである。したがって、この段階は一定の過渡期の要素がなお残りうるような社会主義のごく未成熟な段階であって、移行の具体的な歴史的条件によっては、過渡期の国家であるプロレタリアート・ディクタトゥーラが存続するといった過渡期的様相を、ある程度おびることが十分にありうると思ねばならない。共産主義的社会構成体の低次の段階としての社会主義社会が本来もっている過渡的・二重的性格に、過渡期的性格が付加されることになる。

ソ連のばあい、資本主義的發展における後進性および一国社会主義という歴史的条件は、この国における社会主義社会の形成および初発的發展の全過程、すなわち、過渡期と初期社会主義段階の通過の仕方を多分に特殊なものとしたし、したがって、初期社会主義段階における社会主義の未成熟性が種々の点で倍加されることにもなった。すなわち、ソ連における初期社会主義段階には、単に一定の過渡期の要素が残ったというにとどまらず、それが右の二重の歴史的条件に強く規定される特殊性をともなう形で残ったのであって、この意味で社会主義的所有の実質的形成の点で特殊に未成熟・未展

開な側面を大きく残したのである。社会主義国の数が十いくつに達し、そのあり方に類型の違いといえるほどのものが認められるようになった現在では、ソ連における初期社会主義段階の特殊な未成熟性について客観的な認識をえることは困難ではなくなった。しかし、ソ連が現実の社会主義としては唯一の存在であった当時の条件のもとでは、この特殊な未成熟性はともすれば社会主義に一般的に固有なものとして認識されたし、とくに科学的社会主義の理念の実現をめざす運動のなかでは何か絶対的なものとして固定化される傾向をもつたのであった。

三〇年代にスターリンによる社会主義的民主主義の重大な侵害がおこり、それが長い間許容されたという異常な事態もまたこうした当時の状況のもとで生じたのであって、この意味でそれは歴史の大きな悲劇であったといわねばならない。しかし、こうした事態も、ソ連における初期社会主義段階の特殊な未成熟性の程度がいかに深刻なものであったかを示すとしても、三〇年代のソ連で社会主義社会がとも角にも成立したことを否定しうるものではない。

3 「発達した社会主義段階」規定とソ連社会主義の現在位置

前述の第二四回党大会での提起以来、ソ連は「初期社会主義」の段階を終えて、五〇年代末ないしは六〇年代あたりから「発達した社会主義」の段階にある、とする時期区分がソ連の定説になっている。この新しい段階規定が、第一八回党大会（一九三九年）でスターリンによって提起された「無階級社会主義社会」の建設という課題設定とはことなり、生産手段の社会主義的所有に関して単一の所有形態の形成をその前提としていないことは、所有の制度そのものよりは、むしろその実体の展開に着目する社会主義的所有の把握方法を含意するものといえよう。また、この段階規定の提起の重要な意味の一つは、右のことと関連することであるが、少なくとも現段階以前のソ連社会主義は未成熟な社会主義にしかすぎなかったことの自己認識がえられたことにあるといえる。

ここでは詳述できないが、ソ連の現状には「初期社会主義段階」における特殊な未成熟性の後遺症がなお感じられ、この段階から完全に脱却していない点が残っているし、また社会主義の内在的特質が十分な展開をみせるに至っていない

側面もおおしくなくない。したがって、現在のソ連を言葉の完全な意味で「発達した社会主義」とみなすには明らかに無理がある。しかし、現在のソ連のとげつつある変貌が、「発達した社会主義」のものと考えられるような本質的な新しさをはらんでいることは事実である。経済についてみても、その動向の基調が三〇年代以来の経済管理体制の路線と機構からの脱皮、すなわち、経済の効率化・分権化・民主化にあることは疑いがたいことのように思われる。おそらくはやや長い時間を要するであろうこの脱皮過程の進展のなかで、曲折はあるにしても現状のソ連の抱える困難や矛盾の確かな社会主義的解決の道もまた開けてゆくのではあるまいか。いずれにせよ、現在のソ連は社会主義が本格的な発展にむかうべき局面、すなわち、「初期社会主義」から「発達した社会主義」への移行局面に位置するものと考えられる。

この点に関連して、現在のソ連社会主義は「前期的社会主義」にすぎず、マルクスの理念の体現としての社会主義以前の存在でしかないとする見解がある。しかし、この考え方はソ連における現存社会主義の古典的命題からの乖離を正当にしているとしても、それに急なあまり、ソ連の現実にはそ

の特殊性や困難にもかかわらず、マルクス主義の古典的命題にも規定されているような社会主義の内在的特質が、生活と労働と人間の発達にかかわる多くの基本的な点で貫徹していることを、あえてみようとしないものといわねばならない。

また、社会主義は世界的には生成過程ないしは初期的形成過程にあるにすぎないということから、ソ連その他の現存社会主義についてこれら諸国はおしなべて社会主義の生成過程にあるかのようにみなしたり、一般に社会主義社会は過渡期的性格をもつものであるかのように規定したりするむきもある。しかし、現存社会主義が多かれ少なかれ過渡期的様相をおびていることは事実であるが、社会主義は一般に先に述べたような意味で過渡的・二重的性格をもつとしても、過渡期的性格を本来もっているわけではない。また、社会主義の世界史的形成過程は、少なくとも主要な発達した資本主義国での社会主義への移行が現実のものとなるという条件をぬきにしては、基本的に完了したとはみなしえないであろうが、こうしたことは、現存の個々の社会主義国が社会主義の形成過程をすでに脱け出て、その発展過程にあることを否定するものではないし、また将来右の条件ぬきでも、現存の社会主

義諸国が「発達した社会主義」として発展を上げてゆくことを否定するものでもない。社会主義の世界史的形成過程全体の進展の度合は、もちろん個々の国における社会主義の形成と発展の過程に大きな影響を与えるし、一定の小さくない制約を課すとしても、何かこれを完全に阻止しうるものではない。社会主義の世界史的形成過程は、個々の国の間でのかなりの不均等をはらみつつ展開してゆくものとせねばならないように思われる。

(一九八〇年一月二九日)